

陳毅副総理の永続的な日中友好への願い

陈毅副总理寄语中日友好

大類 善啓

陈毅副总理说：“过去的事就让它过去吧。”

野间团长和龟井先生都表示，尽管陈毅副总理这样说了，但我们日本人对于过去日本的侵华战争负有责任，既然如此，我们是不能忘记过去的，不能把它付之东流。陈毅副总理听罢，当即表示：“说得好！谢谢你们。我们说过去的事就让它过去。你们说日本人不忘记过去的事。这样，两国人民才能真正友好。如果我们总是恨日本，而你们日本人把伤害中国的事忘得一干二净，中日两国就永远不能友好。”

—刘德有著《心灵之约》第 550 页。商务印书馆，2002 年出版—

一到中国，就会发现有许多被命名为爱国主义教育基地的保存抗日时期历史的博物馆。的确，中国高层对于一部分日本人的否认南京大屠杀的舆论以及日本的右倾化倾向怀有危机感，为此“那就让你们看看证据！”的观念成为建设南京大屠杀纪念馆的发端，而日本方面也应该对此作出充分的反省。

然而，中国近几年新建的历史博物馆等设施中，在“勿忘历史！”的口号的号召下，对日本军队残暴的侵略事实通过照片以及情景模型等方式，一幕一幕不厌其详地展现给观众。

中国的青少年看了这些，内心受到强烈冲击，脑海中形成了“日本人不是人！”的印象。事实上类似的文字在展示现场的留言簿中曾经亲眼所见。这些做法只能将对日本人的仇恨深深刻在中国人心中。在此明知可能被误解，也要说“扭曲人性，使人疯狂的是战争！”。即使是“那些人”，只要真心反省所犯的罪行也能够重获新生。当年对被关押在抚顺战犯管理所的日本战犯给予宽大待遇的周恩来总理的精神直到今天仍然让人肃然起敬。

想及此，本文前述中陈毅副总理的对中日友好的拳拳期待，迄今萦绕于耳畔，叫人永志不忘。

(賈廣鑫訳)

《注：上記の中国文は、この原稿の 8 頁に書いてある「さて、中国へ行くと・・・永く記憶に留めていい言葉だと思う」という文章から、ほぼ同様の趣旨を訳したものである》

.....

ノモンハン、方正などを旅して 8 月下旬に帰国後、藤野文晤さんが『日本と中国』（社団法人日中友好協会機関紙 9 月 5 日号）に書かれた「忘れ得ぬ人々」を読んで本当に眼を見張った。藤野さんは有数の中国通経済人であり、中国の要人とも深い交流をされている方である。その藤野さんが、「どうしても忘れられない心の恩師ともいべき人が亀井勝一郎先生だ」という文章の後に、こう書かれている。

＜先生が日本作家協会を率いて北京を訪問された時、陳毅副総理と語り合った。陳毅氏は「亀井先生が日本が中国を侵略したことは忘れない、とおっしゃる。私達は忘れたいと

考えている。これは良いことです。逆に私達が忘れないといい、日本側が忘れないということになれば、これは悲劇です」と発言したそうである>

先日、藤野さんに久しぶりにお目にかかる機会があった。元NHKのアナウンサーでありジャーナリストである木村知義さんが主宰する21世紀動態研究所の定例会である。その日は、詩人の辻井喬さん（日本中国文化交流協会会長でもある）がお話された時だった。木村さんはかつてNHKラジオで、「21世紀の自画像～変わる世界！一日中関係」という特別番組を企画され、07年には方正日本人公墓を紹介したいというので参拝団を紹介したこともある。その番組のゲストがまた辻井喬さんだった。放送後、会報の「星火方正」を辻井さんにお送りしたら、「(当会の交流について)このような純民間の人的な交流こそ、両国の平和で友好的な関係にとって大切なことだと思います。私も機会を作ってお詣りさせていただきたいと思います。(略)運動が盛んになることをお祈りしています」という葉書をいただいたことがあった。

定例会が終わり、辻井さんにご挨拶したら、「なかなか立派な会報ですね」とも言われ恐縮した。その会合で藤野さんに、陳毅さんのこの発言は何年ですかとお聞きしたら、「いやあ何年だったか……。ただ、亀井さんにわざわざ呼ばれ、藤野さん、陳毅さんからこう言われたよ、とはっきりおっしゃった」とのことだった。

陳毅は1901年生れ。19年勤工儉学で渡仏。抗日戦争開始後は新四軍の創設に参加、上海市を解放し上海市長になっている。今でも上海外灘の黄浦公園には陳毅の大きい像が立っている。58年外交部長（外務大臣）、副総理として周恩来を補佐、解放軍元師の一人である。文革中は御多分に漏れず、林彪や江青ら文革派から批判された。

しかし豪放な陳毅は、批判された者は直立し頭を下げるのが当時の慣例だったが、椅子を要求し造反派を驚かせた。更に『毛沢東語録』を読み上げる際には、271頁を開くように大声をあげた。しかし、『語録』が270頁しかない造反派の参加者が不審に思ったところ、陳毅は自ら「陳毅はよき同志なり」と叫んだ。すると同席していた周恩来が「かつて主席（毛沢東）はそう言われた」と説明すると、会場はいつぱんに静まったというエピソードが残っている硬骨漢でもある。

亀井勝一郎は1907年生れ、戦前、東大新人会に所属しマルキシズムに傾倒して逮捕され、獄に入るが転向。その後「日本浪漫派」を経た後は、親鸞に親しんだ文芸評論家だ。私などは10代の頃に、若い人向けに書いた青春論や人生論のような本を読んだぐらいだが、NHKの番組でよく座談会に出られていたのは見ていた。品のいい温厚そうな人という印象が残っている。調べてみれば1966年に亡くなっている。文革時代のことをほとんど知らずに新中国とお付き合いできたなら、その意味ではとても幸せな方だったかもしれない。

今回改めて日本作家協会訪中団を送り出した日中文化交流協会の横川健さんに確認の電話を入れた。横川さんは、間違いがないようにと、その内容をFAXで送ってくださった。実はその内容は、後で探せば私の手元にもあったが見逃がしていた「日中文化交流」（日本中国文化交流協会編集、N o 716 2006. 3.23 発行）の創立五十周年記念特集に掲載され

たものである。

陳毅は1960年の6月6日、日本作家代表団と会見し、こう発言したと記されている。

「日本軍国主義の弾圧を受け投獄された亀井先生が、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私たちは忘れたいと考えている。これは美談です。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れたいということになれば悲劇です」と語った。

この事について、改めて日中の交流事情に詳しい武吉次朗さんに確認した。(武吉さんについては、昨年の方正の総会で「中国と私」という演題で講演をしていただき、その全容は「星火方正」9号に掲載している)

武吉さんは戦後、中国で留用された後、中国で大学を卒業されて1958年に帰国。その後日中貿易に携わった後は大学で教えられ中国語の翻訳で活躍されている。陳毅と日本作家代表団との通訳を担当された劉徳有氏とも親しい方である。武吉さんからはすぐに、劉徳有氏の著書『心霊之約』(2002年、商務印書館発行)の550頁に掲載されている中国文を送ってくださった。その中国文が冒頭に記したものである。

劉徳有氏は、中国文化部の元次官であり、1964年から14年間、特派員として日本に駐在された方だ。毛沢東や周恩来と日本の要人との通訳では大活躍された方である。

なお、武吉さんには中国語訳についていろいろとアドバイスもいただいた。



上の写真は、1960年6月6日に陳毅氏が日本作家代表団と会見した時の集合記念写真だ。陳毅さんは前列右から4人目。陳毅さんを挟んで左が野間宏、右が亀井。若き日の大江健三郎や開高健(前列左端とその隣)も写っている。また、西園寺公一、廖承志などの友好人士の他、茅盾、老舎という有名作家など、錚々たる人たちが並んでいる。

(「日中文化交流」創立五十周年記念特集より転載した)

劉徳有氏が記した陳毅さんの言葉を日本語に訳するところなる。

＜陳毅副総理は「過去のことはもう過ぎ去ったことにしましょう」と言われた。

野間団長（作家・野間宏のこと）と亀井先生は、陳毅副総理はそう言われるが我々日本人としては、日本が過去に起こした中国への侵略戦争については責任を負わなければいけない。従って過去を忘れてはいけなし水に流すことはできません、と表明した。それを聞いた陳毅副総理は即座に、「そう言われることは素晴らしい。皆さん、ありがとう。我々は過去のことは過ぎ去ったものにしようと言ひ、貴方たちは日本人として過去を忘れてはいけなと言われる。そうであるなら、両国人民は本当の友好を実現することができるでしょう。逆に我々が日本をずっと恨み、あなた方日本人が中国を傷つけたことを、きれいさっぱり忘れてしまうようなことになったら、中日両国はいつまで経っても友好関係を実現することはできないでしょう」＞

この陳毅さんの発言は本当に素晴らしいと思う。

なお、ここに出てくる野間団長とは作家の野間宏だ。1915年生れの野間も戦前、反戦活動で入獄した。



（上の会見日時は1964年3月20日。左が陳毅副総理、右が亀井勝一郎氏。亀井氏の右隣は作家の由起しげ子氏、写真提供：新華社）

さて、中国へ行くと、愛国主義教育基地として位置づけられている抗日の歴史を保存する博物館がたくさんある。確かに、南京での日本軍の虐殺はなかったという一部日本人の声や、日本の右傾化傾向に危機感を抱いた中国指導部が、「それでは証拠を見せようではないか」という考えが南京大虐殺記念館建設の発端だったようだ。日本側も十分に反省しなければならない点である。

しかし近年、新装になる中国の歴史博物館などでは「歴史を忘れるな」というフレーズの下、日本軍の残虐な侵略の実体を、写真やジオラマなどを通して「これでもかこれでもか」と詳しく展示している。

それを見た中国の青少年に、「日本人は人間ではない」と思わせるような印象を強烈に叩きつけている。事実そのような言葉を記している感想文ノートを見た。これでは、日本への憎しみの感情を刻みつけるだけだ。誤解を恐れずにいえば、「戦争はどんな人間をも狂気に駆り立てる」のだ。残虐な行為をした人間であろうと、その罪を心から反省し新たに生き直すことができるのだ。ここで改めて、撫順戦犯管理所での日本人戦犯に対して寛大な処遇をした周恩来の精神を、敬意の念をもって思い出す。

陳毅さんの発言はとても光り輝き、永く記憶に留めていい言葉だと思う。

これについては、拙文（70頁に掲載した「ノモンハンと方正で国際主義的精神を思う」や、またその前頁に掲載した、やや内容は重複するが「日本と中国」の記事を参照していただければありがたい。

尖閣諸島問題など、日中間で亀裂が生じると「愛国主義教育の成果」が表われて反日デモが繰り返される。日本でも一部の人たちとはいえ、「反中デモ」を繰り出す時代になってきた。

自分の生まれた国、育った国を愛する感情はいたって自然なことで、そのこと自体は決して否定されることではない。とりわけ自国の文化をいとおしみ愛でる感情はいい。しかし自国を愛するその感情が、隣国を敵視するような形で発露され、狭隘なナショナリズムを煽るような行動は、両国にとってマイナスでしかない。

「愛国無罪」などという反吐が出そうなスローガンを叫ぶ中国の青年たち、「歴史を忘れるな」と言って憎悪を煽り立てる指導者たちには、ぜひ陳毅さんの言葉をじっくりと味わってほしい。憎しみを超えて発言した陳毅さんの言葉は、感嘆するほど実に見事なものだ。中国の若者が、かつての抗日戦争を闘い抜いた革命家がこういう発言をしていたのだと思い起こしてほしい。同時に我々は、この言葉に甘えることなく、日本が侵した歴史の事実をしっかりと忘れないで理性的に行動したいものである。